母子短期分離後の再会場面における乳児の行動・情動表出
—母親の分離不安・乳児の気質を考慮に入れて—

水　野　里　恵

問題意識

Strange-Situation Procedureは，一歳の時点で乳児が母親に対して抱く愛着の質が測定されるとしていること，確かにこうした実験場面に置かれた乳児が母親との再会に対して非常に巾のある個人差を示すこと，さらには，この時の子どもの行動が後の時点で測定された様々な変数をある程度予測すること等から，研究者の注目を集めている愛着測定法である。だが，一方で，再会場面で示す乳児の行動が，「愛着」という概念だけでは説明しきれないのではないかとの疑問が提出され，活発な議論・研究対象ともされている。たとえば，比較文化的研究は，A・B・Cの分布が母親の育児態度・乳児の母親との分離体験・実験場面でとる母親行動の違いに影響されているのではないかとの可能性を示唆したし，乳児の気質に注目する縦断的研究は，乳児の気質・分離場面での乳児の情動状態・再会場面における乳児の行動の間に関連が見られることを明らかにしてきている。ところが，これまでの比較文化的研究は，A・B・Cの分布に文化差が見られることを考察する過程で，再会場面の乳児行動に影響を与えているものとして，母親の育児態度・乳児の母親との分離体験・実験場面でとる母親行動を考慮に入れる有効性を示唆したにとどまり，それらの変数をあらかじめ組み込んだ調査・実験研究を行なってはいない。また，乳児の気質に注目する縦断的研究が明らかにした乳児の気質・分離場面での乳児の情動状態・再会場面における乳児の行動の間に見られる関連は，日本においては，母子短期分離が実験室で行なわれた場合，乳児にかかるストレスが大きくなりすぎるという事情があり，これらの関係は認められてはいない。

そこで，筆者は，文化に規定される部分が大きいであろうと思われる母親の育児態度と実験場面で母親の行動に影響を与えているのではないかと考えられる母親の分離不安をあらかじめ説明変数として組み入れ，なおかつ，Strange-Situation Procedureでの乳児の行動を説明するにも，母親の分離不安といった母親の心理的変数を説明するにも有効であろうと考えられる乳児の「行動的抑制傾向」をも考慮に入れたモデルを立て，それを検証するための一連の調査・実験観察を行なうことを計画した。

研究1

本研究にあたって，立てた仮説は以下のとおりである。母親がより伝統的母親役割観を抱いている場合は，母子一体感が強くなり，子どもと分離しなければならない事態において，母親が感じる心理的負担は大きくなると予想される。また，子どもが新しい状況に慣れにくかったり，人見知りが激しかったりする場合には，母親は，自分が子どもの傍についていてやらなければならないとより強く感じるため，分離不安が大きくなる。

ところで，今回の質問紙調査で対象にする気質次元は，Thomasら（1963，1977）の定義した9つの気質のうち，「接近としりごみ」・「順応性」・「気分の質」の3次元である。このうち，「接近としりごみ」と「順応性」は，新奇な場面・人物・物に対する乳児の行動特徴をいうもので，Kaganら（1984；1986；1987；1989）が，「行動的抑制傾向」と定義し，生理学的指標との対応を明らかにし，文化的要請の圧力・社会化の過程で変容されはするものの，比較的安定した個人差として認められているものである。

さて，母親の分離不安・母親役割観・子どもの気質を測定する尺度は，日本においては標準化されているとはいえない現状である。仮説検討に先立ち，本研究においては，質問紙の信頼性を検討することをも目的にした。

第一子の一歳児を持つ母親380人（母子家庭は対象外とした）に質問紙を郵送したところ，有効回答は，男児を持つ母親97名，女児の母親106名の203名から得られ，それをデータ分析に用いた。本研究の趣旨から，「接近としりごみ」・「順応性」をまとめて「行動的抑制傾向」とした。そして，母親の分離不安・母親役割観・行動的抑制傾向・気分の質についてα係数を算出した結果，それぞれ，0.84，0.71，0.78，0.53，であった。母親の分離不安・母親役割観のα係数は比較的高く，これら母親の要因の尺度は安定したものとしてよいであろう。

母親の分離不安を従属変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行なったところ，重相関係数は0.45（$P<.001$）であり，母親の分離不安の分散の20%を母親役割観と行動的抑制傾向が説明できた。

研究 2

本研究において立てた仮説は以下のとおりである。(1)子どもとの分離不安が大きい母親は，実験的な母子分離場面において感じる不安が高いし，子どもとの再会場面においては子どもと過度の関わりを持とうとする。(2)子どもとの分離不安が大きい母親は，日常子どもを残して外出することが少ないし，伝統的な母親役割観を抱いているので子どもへの対処も分離不安の小さい母親と違うため，乳児の受ける日常経験が，分離不安の大きい母親の子どもと小さい母親の子どもでは違いがあると考えられる。そこで，実験的短期分離・再会場面を設定して子どもの行動観察をした場合，分離不安の大きい母親の子どもと小さい母親の子どもの間には，情動表出・行動において違いが見られる。すなわち，分離不安の大きい母親の子どもは，分離場面においてより動揺を示し，再会場面においては母親に身体的近接のある愛着行動を示す。(3)行動的抑制傾向の強い子どもは，分離場面において負の情動表出が多く見られ，再会場面においては，母親と距離を置いた愛着行動よりは身体的近接のある愛着行動を示す。(4)分離場面における子どもの情動表出は，再会場面において子どもがどのような愛着行動をとるかを予測する。すなわち，分離場面において負の情動表出を示した子どもは，再会場面において母親を回避する傾向が少なく，身体的近接のある愛着行動を示す反面，抵抗行動をしアンビバレントな感情を表わす。

第一子の一歳児を持つ母親445名（母子家庭は対象外とした）に母親質問紙を郵送し，261名からの回答を得た。母親分離不安によって分けられた4つのグループのうち，分離不安の大きい母親のグループ（53人）から専業主婦の母子20組（男児10名，女児10名），分離不安の小さい母親のグループ（42人）から専業主婦の母子20組（男児10名，女児10名）について，家庭での行動観察調査を実施した。

この結果，分離不安の大きな母親と小さな母親では，短期分離場面での感情に差が見られるし，それが再会場面での母親行動に影響を及ぼすとの仮説は支持されなかった。また，分離不安の大きい母親の子どもと小さな母親の子どもでは，分離場面での情動状態・再会場面での愛着行動に違いが見られるとの仮説も支持されなかった。また，子どもの行動的抑制傾向と分離場面での情動状態・再会場面での行動の統計的に有意な関連は見られなかった。分離場面での子どもの情動状態と再会場面でとる子どもの愛着行動の種類には統計的に有意な関連が見られた。その関連の方向は，今回の実験実施にあたってたてた仮説を支持するものであり，欧米での先行研究の結果と一致するものであったことから，日本においても，乳児にかかるストレスを弱めると，分離場面の乳児の情動状態から再会場面での愛着行動を予測することができ，その予測の方向は，文化を超えて同じであったということができる。

さて，最後に，本研究において考慮に入れた「母親の分離不安」と乳児の「行動的抑制傾向」（気質）は，それらを組合せて考慮に入れると，極端に分離場面で混乱を示した子どもを説明する統計的に有意な結果が得られたことを報告しておく。

行動観察の対象となった40組の母子のうち，分離不安の大きい母親と見慣れぬ玩具に対する反応で抑制気質と判定された子どものペアは8組いた。一方，分離不安の小さい母親と非抑制気質の子どものペアは11組であった。前者のペアの子どものうち5人までが，分離場面において極端に混乱を示しエピソード短縮を余儀なくされたのに比較して，後者のペアの子どものうち，分離場面短縮をせざるをえなかったのはわずか1人であった。この結果は，Fisherの直接確率計算法によると，$P<.05$で有意であった。また，再会場面での子どもの行動を見ると，C-Typeに分類された子ども2人は，分離不安の大きい母親と抑制的気質の子どものペアの子どもであり，A-Typeに分類された子ども2人は，分離不安の小さい母親と非抑制的気質の子どものペアの子どもであった。このように，行動観察対象となった被験者から，母親分離不安と子どもの行動的抑制傾向の組合せで抽出された母子19組の分離場面での子どもの情動状態と再会場面での子どもの行動を見ると，興味ある結果が明らかになった。この示唆するところは，短期母子分離・再会場面を設定しての子どもの情動表出・行動を考えるには，これら2つの要因を考慮する必要があるということである。そして，今回本研究のみでは明らかにできなかった研究モデルは，今後比較データをとることによってさらに検討されるべきである。